

森本桂先生のご逝去を悼む

野村周平

国立科学博物館動物研究部

2019年9月、九州大学名誉教授の森本桂先生が亡くなった。日本甲虫界の巨星を失ったことに、我々門下生も含め、甲虫関係者の衝撃は大きい。今回和文誌編集長の保科氏にお誘いを頂き、一筆書かせていただくことになり、大変光栄なことと感じている。以下に大恩ある先生にまつわる思い出をつづってゆきたい。

1981年4月、筆者は九州大学に入学し、昆虫学の道に進みたいと思っていた。しかし当時の九州大学では1、2年生は教養課程であって、学部はそれぞれに分かれているものの、教養課程のキャンパスは福岡市の中心街から西に位置する六本松にあり、昆虫学教室は市の東のはずれに近い箱崎にあった。

筆者は早速、昆虫学教室の先輩の多い生物研究部（課外サークル）に入部し、教養部生物学教室の三枝豊平先生、中西明德先生、瀧洪先生、矢田脩先生をたびたび訪ねて、ご厚誼を得た。しかし、いずれは農学部農学科に属する昆虫学教室に入ることを希望していたので、1年生の間に、昆虫学教室へも顔を出すことになった。

今となっては誰に連れて行ってもらったか、確かには覚えていないが多分、その当時昆虫採集の手ほどきをしてもらっていた、生物研究部の先輩である、野田亮氏に連れて行ってもらったのだと思う。野田氏はすでに森本先生とも懇意だったので、昆虫学教室に着くとすぐ、森本先生の部屋へ連れて行ってもらったと思う。その時初めて森本先生にお会いしてお話する機会を得た。その時は、先生の膨大な知識の一端に触れ、先生の部屋ばかりでなく、ゼミ室、図書室を埋め尽くす昆虫学関係の文献の量に圧倒された。

その時であったか、その後であったかは定かでないが、「昆虫学教室に入ったら、何を専門に研究するか」ということを、森本先生に提案し、許可を得なければならなかった。ずっと後になって気が付いたことだが、そういう新人が教室に入ってきたとき、森本先生の方針は決まっていた。すなわちその新人が「XXをやりたいです」といったらそれをやらせる。特にやりたいものが見つからないようだったら、ゾウムシの適当な群をテーマ

としてやらせる、ということだった。

昆虫研究者として最も重要なその選択において、筆者は無謀にも「アリヅカムシがやりたいです」といってしまったようだった。なのでその後、森本先生からは「ゾウムシのこれこれをやったら？」と水を向けられることも一切なく、およそ40年後の今日に至るまで筆者は、アリヅカムシをやり続けていられたのだと思う。この一事において筆者は、森本先生とその教育方針に、限りない感謝と尊崇の念を禁じ得ない。

その後筆者は無事に昆虫学教室に進学し、主任教授の平嶋義宏先生、助手（当時）の多田内修先生や、先輩の緒方一夫さん、直海俊一郎さんのご指導を仰ぎ、今日これまで、昆虫学界の片隅に籍を置かせていただいている。その間もずっと、ことあるたびに森本先生にお会いして、いろいろとお声をかけていただいた。また、国立科学博物館に奉職して以降も、盆暮れには季節のご挨拶を頂き、近況を知らせるお手紙を実家の方にいただいていた。老齢になる父母が、先生の近況とともに、息子の近況を、それによって知る、ということもあつたようで、誠に感謝に堪えない。

時代は下って2018年3月、筆者はこの年国立科学博物館で開催する特別展「昆虫」に展示するための、巨大ナナフシの標本を、東京大学総合研究博物館の矢後勝也さんに借りに出かけた。するとたまたま、同博物館を訪ねておられた森本先生とお会いすることができた。それまで何度か甲虫学会の大会などでお会いする機会もあつたが、東京ではめったにないことだった。その時先生はお元気に、同博物館のゾウムシ標本を調べておられたが、その後御病気がひどくなって、ご研究もままならなくなつたと伺っている。何にせよその時が、森本先生にお会いすることのできた、最後のチャンスとなってしまった。

思い出せば、森本先生の思い出は、ここに書き尽くすことができないほどたくさんあるが、脈絡もおぼつかなく、とりとめがなくなってしまうので、このあたりにとどめておきたい。森本先生と共に筆者が九大昆虫学教室にいた頃は、まだデジタルカメラが普及する前であり、何かと写真を撮

ておく習慣が身につく前でもあったので、森本先生を写した写真を、筆者は一枚も所蔵していない。そのことが今になって一番大きな心残りとしてひっかかっている。

森本先生の九大以来の永年のご指導、ご厚誼に

心より感謝し、先生のご逝去に際し、ご冥福をお祈りする次第である。本誌への投稿を勧めていただいた、本誌編集委員長の保科英人氏にも、厚く感謝申し上げる。

千の風になった森本先生

小島弘昭

〒243-0034 厚木市船子1737 東京農業大学農学部昆虫学研究室

森本先生、これまで本当に有難うございました。先生から昆虫学について様々なことを学びました。先生との時間は、とても刺激的で、充実した時間でした。

私は先生のことが大好きでした。九州大学大学院に入学するやいなや、私が入学式をサボったため、先生に真剣に怒られました。「はじめをつくれ！はじめを！」と、すれ違い際に、廊下で怒鳴られてしまいました。その横を、同級生の神毛恵さんが飄々と通り過ぎていったことを今でも鮮明に覚えています。彼女も入学式をサボっていたことは、言うまでもありません。その当時、先生は学科長をされていて、先生自身も入学式に借り出されたような状況で、少しイライラされていたのだと思います。先生の部屋の扉には、「入学式に呼ばれたので、急遽、しばらく不在にします」という書き置きメモが貼ってありました。普段滅多に怒らない先生が怒られたと、周りも驚いていました。

先生が遠くに行かれる1週間ほど前に、先生にお会いできたことは本当に良かったです。先生は私に何かを訴えようと必死でしたが、喉にたんがつまって言葉にならず、私は理解することができませんでした。ごめんなさい。度々力を振り絞って起き上がろうとした先生を、私は思わず抱きしめました。先生は訳が分からなかったと思います。そして、私は思い切ってキスをしました。さすがに先生の口にはできず、額と手の甲に何度も、何度もキスをしました。これが、私が先生にできた最初で最後の愛情表現です。

先生は今ここにいませんが、亡くなったとは思っていません。先生は週末、時々私や学生を、先生の運転で食事に連れていってくれました。お世辞にも安心して助手席に座っていられる運転ではありませんでしたが、周りのドライバーの配慮もあ

り、私が乗車した時は、幸いぶつける等の事故はありませんでした。近くのアミレスに連れて行ってくださっていたので、乗っている時間はそれほど長くありませんでしたが、だいたいラジオをかけられていました。しかし、その時は、たまたま音楽CDをかけられていました。その頃よく耳にした秋川雅史の「千の風になって」という曲でした。

先生は、今、私たちの近くにはいませんが、眠ってなんかいませんし、死んでなんかいません。千の風になって、この九大、福岡の大きな空を吹き渡っていると信じています。

私には、先生と同じレベルでの研究は到底できません。弟子としてごめんなさい。でも、先生の意思とDNAをしっかり受け継いで、先生とは別のやり方で、昆虫学を通じ地域環境や地球、人類の平和のために、少しでも貢献していきたいと思っています。

先生、そんな私や私たち後継者をどうかいつまでも見守っていただきたいと思います。

これまで本当に有難うございました。多様で楽しいゾウムシを眺めて、これまで猛烈に働かれてきた分、ゆっくり体を休めつつ、レビジョンの続きを書き進めてください。私が先生の近くに行った時、またお話の続きを聞かせていただけます。



森本先生と九大ゾウムシコレクション（吉武啓撮影）